

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

研究報告書

関西医科大学泌尿器科における男性不妊症の臨床統計

研究協力者 六車光英 関西医科大学泌尿器科助手

研究要旨：男性不妊症の実態に関する多施設調査に参加するために関西医科大学泌尿器科における男性不妊患者の臨床統計を行った。1996年から1997年の2年間における男性不妊症の初診患者数は99例で、原因は精巣因子が79例と最も多く、精路因子は18例、性機能因子は2例であった。精液検査を行えたのは90例で、精子濃度は正常が37例、乏精子症が27例、無精子症が26例であった。当科で治療を行ったのは55例で、その内訳は精巣因子に対する治療が35例、精路因子に対する治療が11例、性機能因子に対する治療が1例、精子回収が2例であった。今後この多施設調査の結果をもとに男性不妊症治療の在り方が検討されることが望まれる。

A. 研究目的

生殖医療が社会的に注目される昨今、男性不妊症治療においてもその在り方を検討する必要がある。そのためには男性不妊症の実態を把握する必要があるが、これまでにそのような全国調査は行われていない。今回、男性不妊症の実態に関する多施設調査に参加するために当科における男性不妊患者の臨床統計を行った。

B. 研究方法

1996年1月から1997年12月の2年間に関西医科大学附属病院泌尿器科を初めて受診し、男性不妊症と診断された患者について原因、精液所見、治療内容を調査した。

C. 研究結果

(1) 患者数

2年間における男性不妊症の初診患者数は99例であった。当科の年間初診患者数は約2000人であり、男性不妊症は全患者の約2.5%であった。

(2) 原因

男性不妊症患者99例の原因は、精巣因子が79例(79.8%)と最も多く、その内訳はKlinefelter症候群などの先天性が5例(5.1%)、間脳・下垂体性が1例(1.0%)、精索静脈瘤が35例(35.4%)、特発性が36例(36.4%)、その他が2例(2.0%)であった。次に精路因子によるものは18例(18.2%)で、その内訳は精管欠損などの先天性が1例(1.0%)、精管結紮術後・ヘルニア手術後などの通過障害が15例(15.2%)、炎症が1例(1.0%)、その他が1例(1.0%)であった。また性機能因子は2例(2.0%)で、その内訳は射精障害と性交障害が各1例であった。

(3) 精液所見

精液検査を行えたのは 90 例で、精子濃度は 2000 万 / ml 以上の正常が 37 例、乏精子症が 27 例、無精子症が 26 例であった。無精子症を除く 64 例の運動率は 50%以上の正常が 20 例、無力精子症が 44%で、死滅精子症はなかった。精子形態を評価できたのは 59 例で、正常形態が 30%以上の正常は 36 例、奇形精子症は 23 例であった。

(4) 治療内容

男性不妊症患者 99 例中、当科で治療を行ったのは 55 例であった。その内、精巢因子に対する治療を行ったのは 35 例で、その内訳は薬物療法が 19 例、精索静脈瘤手術が 16 例であった。なお、薬物療法はクロミフェンが 4 例、漢方薬が 15 例で、精索静脈瘤手術の術式は全例低位結紮術であった。

次に精路因子に対して治療を行ったのは 11 例で、その内訳は精路再建術が 10 例、炎症に対する抗菌剤投与が 1 例であった。なお、精路再建術の術式は精管精管吻合術が 8 例、精巢上体精管吻合術が 2 例であった。

また、性機能因子に対する治療を行ったのは 1 例、精子回収を行ったのは 2 例であった。

D. 考察

最近の生殖補助技術 (ART) の発展はめざましく、男性不妊患者もかなりの頻度で TESE-ICSI などの ART で治療されるようになっている。これを反映して、精巢因子に対して薬物療法を行ったのは 19 例と過去に比べて減少している印象を受けた。また 44 例は当科で全く治療を行わなかったが、この内には ART を行うために他院に紹介した症例が多数含まれる。

外科的治療が行われたのは 26 例で、その内訳は精管精管吻合術が 8 例、精巢上体精管吻合術が 2 例、精索静脈瘤手術が 16 例であった。これらの患者に対しても ART を first line の治療として考えることは可能ではある。しかし多くの患者は可能ならば自然妊娠を希望しており、泌尿器科医は男性不妊の原因を的確に判断し、適切な治療法を選択する努力が必要であると考えられる。

今後この多施設調査が治療成績にまで拡大され、その結果をもとにどのような治療法が真に男性不妊症患者にとって有益か検討されることが望まれる。

E. 結論

男性不妊症の実態に関する多施設調査に参加するために関西医科大学泌尿器科における男性不妊患者の臨床統計を行った。今後この多施設調査の結果をもとに男性不妊症治療の在り方が検討されることが望まれる。

F. 研究発表

今後発表の予定である。

G. 知的所有権の取得状況

知的所有権の取得なし。